

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2007年5月 第11号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email omiya@church.jp

スパイダーマン、ほどほどにね！

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

映画スパイダーマン3が今世界一観客率を上げているという評価を得ていますが、我家にもファンが一人いて見に行ってきました。この頃の我家が見る映画はほとんど子どもの映画ですが、映画のチケットを手に入れるのはいつも始まる時間のギリギリときです。ですから、座る席は最前列になったり、前列の隅っこであったりするので、首が痛い思いをしながら映画館を出ます。しかし、今回は珍しく前売り券を買って、真中の見やすいところに座って観ることができました。

ところが、映画鑑賞後スパイダーマンが我家の息子に与えている影響はわたしの想像を超えています。息子の日常生活はまるでスパイダーマンの日常生活であるかのような、スパイダーマンになり切った日々です。腕のどこかに傷跡があればそこから糸が出てくるのに…それで傷跡を捜してみたり、腕を空の方へ差し出して糸を出すふりをしてみたり、道を歩いていて重い体を思いっきり飛ばしてみたり…(体が重くて地面から10センチも上がらないのですが…)。そして、ついには、「ママ、説教でスパイダーマンの話ししないの?」と、わたしの説教にまでスパイダーマンの影響は及びそうになっています^^; 息子の将来はスパイダーマンとして生きるのだそうです。このことって、見聞きしていないふりをしていればいつかは静かになりますよね^^

ところで、実は、我家にもう一人(?),すでに、スパイダーマンになり切ったものがいました。この頃、家の中が暑くなると窓を網戸にして外の空気が入るようにしていますが、その網戸のざらざらした感触が気に入ったらしく、猫娘が網戸に飛び掛ってくっついてばたばたして遊ぶのです。息子と二人で顔を合わせて思わず笑ってしまいました。「まるで、スパイダーマンのようだ!」と同じことを考えていたからです。

こんなエピソードの中で5月はあっという間に過ぎてしまいました。教会の隅っこのアジサイはいつの間にか薄ピンク色と紫色のつぼみを出していました。もうすぐ梅雨ですね。みなさんは、その間、いかがお過ごしでしょうか。皆さんのところにもいろいろのエピソードが生まれて消えたり、そしてまた新しいエピソードが生まれたりしていることでしょう。

私たちの教会にも、また一つ新しいエピソードが生まれました。ペンテコステの礼拝の中で一人の青年が洗礼を受けました。実はイースターに受洗の計画をしていたのですが、イースターがいつなのかわからなくて、それで彼はイースターに旅行の計画を組んでしまったのです。それでペンテコステになったのです。これも一つ、わたしたち教会ではほほえましいエピソードになっています。これから、ともに主イエスの道を歩むことが楽しみです。

最後に、シオン通信 11号発送が大分遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

聖書のみことば

創世記 11章 1-9節

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

使徒言行録 2: 1~21

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、”霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉で使徒たちが話をしているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているものではありません。そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしためにも、そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。上では、天に不思議な業を、下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。主の偉大な輝かしい日が来る前に、太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる。主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

ヨハネによる福音書 16: 4b~11

「初めからこれらのことを言わなかったのは、わたしがあなたがたと一緒にいたからである。今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、11 また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。

説 教

『新しく生まれ変わる』

現代の子どもはコミュニケーションが取れなくなってきたと頻りに報じられるようになりました。しかし、これは子どもだけのことだけではないかもしれません。実は、大人が他者とのコミュニケーションを取れなくなってきたから子どもも取れなくなってきた、ということではないかと思えます。

同じ言葉を使って、不便なく意志伝達をしているのに、コミュニケーションが取れなくなっていると言われているのです。つまり、自分も相手もわかる言葉で話しているのに通じないと言われるのです。これは、とても悲しいことでありますし、残念なことです。

とは、言葉とは、ただの音ではなく、言葉を語る人の置かれている背景を写し出すということと知らされました。言葉の造られた背景ももちろんのことですが、語る人がどのような思いの中にいるのか、何を考えているのか、または育てられた文化的なものさえも、言葉の表現には現われるのです。それなのに、現代の言葉は、これらのことを伝える力を失っている、というのです。つまりそれは、言葉自らの力が失われているのでしょうか。それとも、言葉を使っている人の問題なのでしょうか。このことは同じ言葉を使って話している私たちにとって、適当に見逃してしまうことではないと思います。

今日の第一日課で読まれました創世記 11 章は、世界の人々は同じ言葉を使って、

同じように話していたと記すことから始まります。つまりこのことは、何気なく書いているのではなく、同じ言葉を使っていたことが実は問題になったということを表すための書き方です。「世界の人々は同じ言葉を使って、同じように話していた…」。そしてついには、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう。」…

バベルの人たちが塔を建てるために用いているものはレンガとアスファルトでした。当時、レンガとアスファルトを用いているということは、文明がそれだけ進んでいたことを現すと同時に、人たちの暮らしがそれだけ豊かであることを示します。文明が進み、生活が豊かになってきたとき、人は、「天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」と、「全地に散らされることのないようにしよう」しようというのです。散らされるのを恐れている文明人たちです。

大体の人間は年齢を重ねる度に成長をします。いつまでも子どものままにはいません。大人になりますと、自立した大人としての歩みを歩みはじめます。親の助けをいれなくとも歩けるように、精神的にも肉体的にも経済的にも自立します。

創世記2章に描かれている史上最初のカップルも、結ばれることを通して父母から離れていったと記されています。

このことは教会も同じです。今わたしたちの教会は自立へ向けて歩み始めていますが、人と全く同じとはいえないけれども、しかし、ある程度の時間が経てば成長を重ねていくのが生きている教会です。その意味では人間とそれほど変わらないと言えると思います。しかし、成長しなくなった、成長できなくなった、延びる時期なのに一年に一センチでも延びなくなったときには必ず何らかの問題があるからです。栄養が足りないとか、精神的に何かを抱えているとか、何かの原因があるのです。その原因が、バベルの人たちにとっては、同じ言葉を使って同じように話していたことにありました。

つまり、言語的な問題ではなく、同じ言葉を使って違うように表現する力を失ったということなのです。同じ言葉を同じようにしか話せないということは、自分に合うように、自分らしい言葉の表現ができなくなったことなのです。

今私たちは日本語という同じ言葉を使っていますけれども、しかし、使う人によって同じ日本語でも表現が異なります。わたしは韓国人ですから韓国語的に話しているでしょう。同じ日本人でも生まれ育った場所が異なるために使い方も異なる、同じところで生まれた兄弟姉妹さえでも、それぞれの性格が違うから言葉の表現や言葉の用い方も異なるのです。性の違いによっても異なってきます。しかし、バベルの人たちは同じ言葉を同じように話してしまし

た。語る人のアイデンティティがことばの中には含まれていなかったというのです。

今日はペンテコステ、つまり聖霊降臨祭です。弟子たちが、今までは実際に目に見えるイエスさまの影の下で考え、行動し、その度にイエスさまに責められたり褒められたり、起こられたり、そして慰められたりしながら過ごしてきました。しかし、もうイエスさまは弟子たちを離れて、弟子たちと別れて天に昇られなければなりません。それは、そうしなければ神さまが送ると約束しておられるもう一人の方、弁護者、つまり真理の霊を送ることは出来ないからです。このもう一人の方、弁護者、真理の霊が送られてこなければ、弟子たちはいつまでも偉大な力の陰にいて、自分らしさを失ったまま、イエスさまの真似をしたり、神的なものとして、まるで神託を受けたかのようにしかできない。それこそ、自分らしさをまったく失った歩みしかできないのです。ですから、イエスさまは地上を離れ、弟子たちから離れ、天に昇られなければなりませんでした。

使徒言行録 2 章には、五旬節の祭りの時に、エルサレム神殿に集って祈っていた弟子たちの上に、み霊が下った出来事が記されています。これは、イエスさまが天に昇られる際に約束してくださったものでした。それによって弟子たちは熱々と異なる言葉を語り始めました。「炎のような舌が分かれ分かれに現われ、一人ひとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満た

され、『霊』が語らせるがままに、ほかの国々の言葉で話し出した」と記します。ところが、五旬節の祭りを祝うためにエルサレムに集っていた人たちが、この弟子たちの異なる言葉で語るメッセージがわかったというのです。まるで自分たちの国の言葉で聞いているかのように、まるで自分が聞きたい言葉を聞いているかのように、わかったのです。理解できたのです。弟子たちは『霊』が語らせるがままの言葉で語っていたからです。

この弟子たちの言葉は異言であった。つまり、神の国の言葉であったと理解することから、特に韓国の教会は聖霊を受けること=異言を語ることに決め付けます。わたしも韓国の教会にいたときに異言で語る体験をしました。しかし、自分が何を語っているのか全くわかりませんでした。

今日の使徒言行録の弟子たちに倣う初代教会の人々の中にも異言を語る人たちはいたようです。しかしパウロは、異言を語る人がいれば必ずそれを解釈する人がいなければならないといいます。何を語っているのかわからない異言は必要ではないということなのでしょう。ですから、異言は聖霊のパプテスマを受けたしるしではなく、一つの賜物と思います。そして、大切なことは、この初代教会の弟子たちが、『霊が』語らせるがままに語ることができたということではないでしょうか。つまり、弟子たちの上に降った炎のような舌、それは、皆の上に一気に、どさっと下ったのではありません。「一人ひとりの上にとどまった」と

記します。すなわち、マリアならマリアの上にとどまり、ペトロならペトロの上にとどまって、そして、マリアはマリアの言葉でもってマリアらしく語り、ペテロならペテロの言葉で持ってペトロらしく語ることができるように、各々が自分らしい言葉でもって人々に語るようにさせた、神の『霊』がそうさせたのです。これがペンテコステの出来事であり、つまり、真理の霊、弁護者、イエスさまが昇天なさる際に約束されておられた、贈り物なのです。

ですから、この使徒言行録はバベルの人たちが置かれていた状況とは反対の出来事なのです。バベルの人たちは皆同じ言葉を同じように語っていました。しかし、『霊』が語るがままに語る弟子たちの言葉は、それぞれ異なる言葉でした。

現代の人はコミュニケーションの能力を失っていると言われる今のわたしたちの社会で、家族という近い関係においても、子どもが何を考えているのかわからない、それで家庭内暴力や殺人に至るまで、武器でもって心の思いを表現せざるを得ない状態にまで陥っています。これは、同じ言葉を同じように話すことを強いられている世代が抱え、そして今にまで残している課題ではないでしょうか。

金曜日の聖書入門クラスの中で今創世記を学んでいます。女性の視点から学ぶということで、それぞれがおかれている立場から読むことを通して、刺激の多い勉

強会となっています。新たな視点から聖書に接する度に感じることは、伝統的な読み方の中では一つの視点しかなかったということなのです。つまり、決められている視点が一つあって、それは、強い男性の視点なのですが、この父権制社会の中で当たり前とされている視点から読むとき、異なる視点から読むことはゆるされないのです。ですから、聖書に書かれている言葉に対して異なる意見は、沈黙させられるのです。決められている一つの支配的な視点の下で個々人の個性的な読み方や考え方を殺さなければならぬ。つまり、旧約聖書のバベルの人たちのように、一つの言葉で、同じように話すことが強いられるのです。

弟子たちは、集って祈っていたときに、一人ひとりの上にとどまってくださった神さまの熱い『霊』が語らせるがままに、他の国々の言葉で語ることが出来たのに、現代の私たちはどうして同じ言葉で、同じように話すことを強制されなければならないのでしょうか。それは、天まで届く塔を作って有名になろう、散らされないようにしようと、神の座にまで挑戦していた、あのバベルの人たちと同じようにあることをむしる勧めている事ではないでしょうか。

聖書を自分の言葉で語るということ。五旬節に弟子たちの上にとどまり、弟子たちが各々の言葉で語ることが出来るように導かれた真理の霊、ですから、この真理の霊の働きの下でのみ、はじめて人は自分らしく語ることが出来るということ。自分ら

しく語ることができるということは、自分の置かれている状況が具体的に見えてくるということなのです。自分が今心地よいと座っている場所が、実は、人の上に座り込んで、気持ちいい思いをしていたりはしないだろうか、置かれている状況がちゃんとわかるということ。本当は心の深いところの恐れを吐き出して、わたしは怖いですが、外へ出て行くのが怖いですが、だから助けてくださいと叫びたいのに、周りの目がそう叫ぶことを赦してくれなさそうで、叫べない、そんな自分が見えているのか…みんなと同じくいないと変わったもの扱いをされるから、だから心の内面が打ち出せなくて、だから武器をもって自分を表すしかない今の世代…

人が肉体的に、精神的に、そして経済的に自立したとしても、しかし、その人の歩みが他者を必要としない歩みであったり、または、他者を自分と同じ歩みをするように強いてしまうなら、それは本当の意味で自立したとは言えないのではないのでしょうか。つまり、本当の自分は、他者の助けなしには生きることが難しいことを知らされ、他者が理解でき、受け入れられる言葉で話し、他者とともに生きることこそ生きる意味を悟るとき、これこそ、新しく生まれ変わった状態であり、自立した一人として、神の前に、神なしで、神とともに歩む人の姿ではないのでしょうか。

今日は、禹さんが洗礼を受けますが、洗礼を受けるということは、これからイエス・キリストとともに、イエスキリストが生きられたようにわたしも生きて、つまり、他者とともに生きる歩みをします、ということの一つの決断なのです。つまり、自分のゆえに他者が生きて、そしてはじめて自分が生きられるのだという真理に気づかされたものとして歩むことがゆるされる、これが洗礼を通して新しく生まれ変わる人の歩みでもあるのです。

ペンテコステの熱々の出来事の中に、禹さんも、そして、ここに集ってみる皆さんも導かれ、「霊」が語るがままに語ることの体験をするものとして導かれますように。真理の霊、弁護者、つまり、主イエス・キリストがわたしたちに、自分らしく語れ、ちゃんと自分のアイデンティティを持って語れと求めておられます。今週も主イエス・キリストが送ってくださる導きの中で、自分らしさを失わずに、自分の言葉でもって相手に語りかける者として歩もうではありませんか。

【6月礼拝予定】

【主日礼拝】 毎週日曜日 朝 10時30分～

<p>6月3日(日) 三位一体主日 聖書：イザヤ6:1～8、ローマ8:1-13、ヨハネ16:12-15 主題：耳をすませば</p>
<p>6月10日(日) 聖霊降臨後第2主日 聖書：エレミヤ7:1-7、1コリント15:12-20、ルカ6:37-49 主題：神の偽証人が証人か</p>
<p>6月17日(日) 聖霊降臨後第3主日 聖書：列王上8:41-43、ガラテヤ1:1-10、ルカ7:1-10 主題：ひと言おっしゃってください</p>
<p>6月24日(日) 聖霊降臨後第4主日 聖書：列王上17:17-24、ガラテヤ1:11-24、福音書 ルカ7:11-17 主題：口の中におかれた真実の言葉</p>

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

【その他の集会】

- ・ 毎週水曜日午後7時より夕礼拝を行っています。主日日課と同じです。
- ・ 毎週金曜日午後3時より女性の視点による聖書の学びを行なっています。
- ・ その他、随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。